

平成24年7月9日

各 位

公益財団法人 大同生命国際文化基金

2012年度（第27回）大同生命地域研究賞
受賞者の決定および贈呈式の開催

公益財団法人 大同生命国際文化基金（大阪市西区江戸堀1-2-1 理事長：喜田哲弘）では、標題の研究賞について、本年度の受賞者を下記のとおり決定いたしました。

つきましては、贈呈式を開催いたしますのでお知らせいたします。なお、受賞者ならびにこの賞に関する資料を添付いたしますのでご覧ください。

記

1. 贈呈式

日時：平成24年7月13日（金）午後2時～

場所：大同生命保険株式会社 大阪本社

大阪市西区江戸堀1-2-1 電話：06（6447）6357

2. 受賞者

1）大同生命地域研究賞（副賞300万円ならびに記念品）

立教大学名誉教授 青柳 真智子 氏

2）大同生命地域研究奨励賞（副賞100万円ならびに記念品）

東北大学東北アジア研究センター准教授 高倉 浩樹 氏

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授
附属現代インド研究センター長 田辺 明生 氏

3）大同生命地域研究特別賞（副賞100万円ならびに記念品）

I K T T（クメール伝統織物研究所）代表 森本 喜久男 氏

以上

照会先：公益財団法人大同生命国際文化基金 事務局（北迫）
電話 06（6447）6357 / Fax 06（6447）6384

大同生命地域研究賞について

1. この賞を設けた趣旨

大同生命国際文化基金は、大同生命保険相互会社(当時)の創業80周年記念事業として、外務大臣の認可により1985年3月に設立された財団法人であります。その目的は「国際的相互理解の促進に寄与する」こととし、そのためにいくつかの事業を行ってきました。

この賞は、「地球的規模における地域研究」に貢献した研究者を顕彰するもので、様々な地域の人と文化に対する理解を究極の目的としている点で、本財団の設立目的と一致します。それはいわば国際的相互理解を考える上で最も基礎的な部分を担うもので、医学に例えれば臨床医学に対する基礎医学のような関係にあたります。こうした理解に立ち、関係学界の協力を得て、この賞を創設しました。

2. 賞の内容

この賞は、次の3部門で構成されています。

(1) 大同生命地域研究賞

多年にわたって地域研究の発展に著しく貢献した研究者1名に対して、賞状、副賞300万円ならびに記念品を贈呈するものです。

(2) 大同生命地域研究奨励賞

地域研究の分野において新しい展開を試みた研究者2名(地域研究賞の該当者がいない場合、3名とすることも可)に対して、賞状、副賞100万円ならびに記念品を贈呈するものです。

(3) 大同生命地域研究特別賞

対象地域を通じて、国際親善、国際貢献を深める上で功労のあった者1名に対して、賞状、副賞100万円ならびに記念品を贈呈するものです。

3. 選考

(1) 選考については、本財団が委嘱する選考委員で構成する会議により決定されます。

2012年度の選考委員は次の5名です。

(五十音順)

総合地球環境学研究所名誉教授	秋道 智彌 氏
日本女子大学文学部教授	臼杵 陽 氏
財団法人自然環境研究センター理事長	大塚 柳太郎 氏
国立民族学博物館教授	小長谷 有紀 氏
政策研究大学院大学教授	原 洋之介 氏

(2) 候補者の推薦については、全国の大学、研究機関等の研究者に推薦委員を委嘱し、推薦委員より書面による推薦を受けることを原則としています。

以上

2012年度

大同生命地域研究賞受賞者一覧

◆大同生命地域研究賞 (副賞300万円ならびに記念品)

「オセアニア地域研究の推進とエスニシティの理解への貢献」
に対して

立教大学名誉教授 ^{あおやぎ まちこ} 青柳 真智子 氏

◆大同生命地域研究奨励賞 (副賞100万円ならびに記念品)

「シベリア地域研究における新局面の開拓と展開」に対して

東北大学東北アジア研究センター准教授 ^{たかくら ひろき} 高倉 浩樹 氏

◆大同生命地域研究奨励賞 (副賞100万円ならびに記念品)

「インド社会の歴史人類学的研究」に対して

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授
附属現代インド研究センター長 ^{たなべ あきお} 田辺 明生 氏

◆大同生命地域研究特別賞 (副賞100万円ならびに記念品)

「カンボジアにおける伝統に根ざした生活文化と自然再生への実践的な貢献」
に対して

I K T T (クメール伝統織物研究所)代表 ^{もりもと きくお} 森本 喜久男 氏

2012年度
大同生命地域研究賞

青柳 真智子 氏
(立教大学名誉教授)

略 歴

青柳 真智子(あおやぎ まちこ)

1. 現 職 : 立教大学名誉教授
2. 最終学歴 : 東京都立大学大学院博士課程満期退学 (1964年)
3. 主要職歴 : 1972年 清泉女子大学文学部助教授
1976年 立教大学文学部助教授
1977年 立教大学文学部教授
1997年 茨城キリスト教大学文学部教授
2003年 同上退職
4. 主な著書・論文 :
(以下3作品は、筆名“青柳 真智子”で執筆)
 - ①『秘境トンガ王国』〔二見書房, 1964〕〔三修社, 1984 再版『女の楽園トンガ』〕
 - ②『モデクゲイ—ミクロネシア・パラオの新宗教』〔新泉社, 1985〕
 - ③「Bitang ma Bitang(2つの半分)、Eual Saus(4つの角)および機構的混乱」〔『ミクロネシアの文化人類学的研究』国書刊行会, 1986〕
(以下は、筆名“青柳 まちこ”で執筆)
 - ④『遊びの文化人類学』〔講談社現代新書 476, 1977〕
 - ⑤『子育ての人類学』〔河出書房新社, 1987〕
 - ⑥『トンガの文化と社会』〔三一書房, 1991〕
 - ⑦“Modekngai: A New Religion in Belau, Micronesia”〔新泉社, 2002〕
 - ⑧『国勢調査から考える人種・民族・国籍』〔明石書店, 2010〕
 - ⑨『もっと知りたいニュージーランド』編著〔弘文堂, 1997〕
 - ⑩『ニュージーランド事典』編集代表〔春風社, 2007〕
 - ⑪『ニュージーランドを知るための63章』編著〔明石書店, 2008〕
 - ⑫“Kinship Organisation and Behaviour in a Contemporary Tongan Village”
〔Journal of the Polynesian Society 75-2, 1966〕
 - ⑬「旧南洋群島における日本の宗教政策」〔『南方文化』4, 1977〕
 - ⑭「ベラウ親族集団の系譜と父親の役割」〔『国立民族学博物館研究報告別冊』6, 1989〕
 - ⑮「彼らは如何にしてラタナ教徒となりしか」〔『社会人類学』15, 1989〕
 - ⑯「漁業補償と都市のマオリたち」〔『先住民と都市』青木書店, 1999〕

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数
5. 備 考 : 1984年 文学博士 (東京都立大学)

業績紹介

「オセアニア地域研究の推進とエスニシティの理解への貢献」に対して

紹介者： おおつか 大塚 りゅうたろう 柳太郎

(財団法人 自然環境研究センター 理事長)

青柳真智子氏は、1960年代よりオセアニア島嶼国において文化人類学のフィールドワークを開始し、日本におけるオセアニア地域研究の礎をつくられた1人である。同氏は、地域研究が本来重視すべき幅広い視座をもち、オリジナリティに溢れる研究成果を発表すると同時に、研究者の視点をとおして成果の社会還元にも積極的に取り組んできた。さらに、同氏は「人種」や「民族」などのヒト（人間）の集団区分がもつ科学的な不確実性と、社会的な差別意識に与える影響に早くから注目し、科学的・社会的に正当なエスニシティの理解を目指した研究・啓発活動において先導的な役割を果たしてきた。

青柳氏は1953年に、日本にはじめて社会人類学専攻が開設された、東京都立大学大学院社会科学研究科の修士課程に第1期生として入学した。同研究科で修士号を取得後、体調を崩した時期もあったが、1959年に同研究科社会人類学専攻の博士課程に入学し、1961年からオセアニア地域での調査を開始した。東京都立大学社会人類学教室には、岡正雄博士、馬淵東一博士をはじめとする日本の文化人類学・社会人類学のパイオニアが在職されており、きわめて恵まれた研究環境で研究者としての第一歩を踏み出した。さらに、青柳氏は1961-62年にハワイを皮切りにオセアニア地域を訪れた際、篠遠喜彦博士、ジャック・バロー博士、マーシャル・サーリンズ博士など、オセアニア研究をリードしていた多くの研究者から直接教示を受ける機会を得た。また、1960年代にオセアニア調査に着手した、石川榮吉博士をはじめとする多くの日本人研究者とも親交を深めている。これらの経験が、同氏のその後の研究活動において、人びとの生活・習慣、社会・経済、政治、宗教、教育、ジェンダー論など、多岐にわたる分野を関連づけ論考することに結びついたといえよう。

青柳氏の最初の原著論文は、1966年に *Journal of the Polynesian Society* (JPS) に掲載された”Kinship Organisation and Behaviour in a Contemporary Tongan Village” (Volume 75, pp. 141-176) である。この研究は、トンガ王国農村部において、伝統的な親族関係が現在も（調査時点でも）社会規範や人びとの日常行動を強く律していることを明らかにしたもので、JPS誌にコメント論文が掲載されるなど大きな反響をよんだ。学位論文研究では、パラオ（現ペラウ）共和国で1910年代に始まったモデクゲイと呼ばれる伝統宗教とキリスト教を混合した新興宗教に着目し、フィールドワークと文献研究に基づき、社会運動の側面をもつモデクゲイを人びとの生活および価値観と関連づけ、

戦前の統治国であった日本政府への抵抗運動としての側面を含め分析した。この成果に基づき、青柳氏は 1984 年に東京都立大学から文学博士の学位を授与されるとともに、その内容は 1985 年に『モデクゲイ—ミクロネシア・パラオの新宗教』（新泉社）として、さらに 2002 年には *Modekngel: A New Religion in Belau, Micronesia*（新泉社）として出版された。また、ニュージーランドを 1962 年に訪れて以来、先住民マオリの社会と宗教、マオリとヨーロッパからの移住者との関係史、さらにはニュージーランドにおけるさまざまな今日的課題を研究し、多くの学術書・啓発書を著してきた。1992 年に設立されたニュージーランド学会の活動には当初から重要な役割を果たし、2008 年から現在に至るまで学会長を務めている。

青柳氏はフィールドワークの成果を背景に、現代社会におけるさまざまな問題に対しても積極的に発言してきた。特に、日本で曖昧な理解がなされてきた「人種」と「民族」などのヒト（人間）の集団区分の問題点を指摘し、科学的・社会的に正当なエスニシティの理解を押し進めた活動が特筆される。日本における人種の理解は、ユネスコをはじめとする国際的な場において、人種分類は科学的な根拠が希薄で、人種差別に結びつく傾向が強いため死語と化しているとの認識と大きく乖離していたし、民族に関しても、アイヌに対する理解不足や中学校・高等学校の教科書で不適切な記載が多くみられた。このような状況に対し、自然人類学・文化人類学などを専攻する研究者が日本学術会議などとも連携し偏見を是正する活動を展開してきたが、同氏はその中心メンバーの 1 人として活躍された。同氏は、人種・民族に関する論考をさらに深め、世界中の人びとの基本的人権などとも関連する国籍に関する研究や、各国の国勢調査の比較研究なども行ってきた。

青柳氏は、「古い」「子育て」「ジェンダー」「遊び」「開発」「文化交流」などにも深い関心を寄せ、それぞれをテーマにした著書も著している。「古い」を例にあげると、世界のさまざまな社会における高齢者（老人）に対する認識を冷静に見据え、「健康な老人」と「心身の衰えがみられる老人」では異なって捉えられている傾向を指摘している。すなわち、「健康な老人」は尊敬・愛着の対象として大切にされるものの、「心身の衰えがみられる老人」は社会にとって重荷になるとみなされているのである。このように、青柳氏はさまざまな社会的関心事に対し、幅広い知識に基づく鋭い指摘をとおして、多くの分野の研究者や一般読者に知的な刺激を与えてきた。

青柳氏の業績として、日本の文化人類学の草創期にあたる 1960 年代から、優れた学術書の翻訳を積極的に行ってきたこともあげられる。ホーマンズとシュナイダー著「交叉イトコ婚と系譜」（『文化人類学リーディングス』誠信書房、1968 年）やラドクリフ＝ブラウン著『未開社会における構造と機能』（新泉社、1975 年）などは、とくに若い研究者の間で基本文献として広く読まれてきた。同氏は、清泉女子大学、立教大学、茨城キリスト教大学において長らく教鞭をとり、多くの学生に文化人類学を中心とする地域研究の意義を教授するとともに、著作や学会活動とも連動し多くの地域研究者を育成してきた。

2012年度
大同生命地域研究奨励賞

高倉 浩樹 氏
(東北大学東北アジア研究センター准教授)

略 歴

高倉 浩樹(たかくら ひろき)

1. 現 職 : 東北大学東北アジア研究センター 准教授
〔勤務先電話番号 022 (795) 6009 (代表)、022 (795) 7572 (直通) 〕
2. 最終学歴 : 東京都立大学大学院博士課程満期退学 (1998 年)
東京都立大学 (社会人類学) 博士 (1999 年)
3. 主要職歴 : 1997 年 日本学術振興会特別研究員 (DC2)
1998 年 東京都立大学人文学部助手
2000 年 東北大学東北アジア研究センター助教授
2007 年 同上准教授 (職制変更による)
現在に至る
4. 主な著書・論文
 - ①『極寒のシベリアに生きる―トナカイと氷と先住民』 (編者) 新泉社 [2012]
 - ②『聞き書き 震災体験―東北大学 90 人が語る 3.11』 (共監修) 新泉社 [2012]
 - ③『極北の牧畜民サハ―進化とマイクロ適応をめぐるシベリア民族誌』 昭和堂 [2012]
 - ④『シベリアとアフリカの遊牧民―極北と砂漠で家畜とともに暮らす』 (共著) 東北大学出版会 [2011]
 - ⑤Good to eat, Good to live with: Nomads and Animals in Northern Eurasia and Africa (共編) [Northeast Asian Study Series 11, Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University, 2010]
 - ⑥『ポスト社会主義人類学の射程』 (共編) [国立民族学博物館調査報告 72 号、2008]
 - ⑦Indigenous Ecological Practices and Cultural Traditions in Yakutia: History, Ethnography and Politics (編者) [Northeast Asian Study Series 6, Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University, 2003]
 - ⑧『社会主義の民族誌―シベリア・トナカイ飼育の風景』 [東京都立大学出版会、2000]
 - ⑨「生活様式としての遊動定住連続体―一定住化政策後の森林ネネツの社会組織と居住」 [『東北アジア研究』 14 号、2010]
 - ⑩「先住民問題と人類学―国際社会と日常実践の間における承認をめぐる闘争」 [窪田幸子ほか編『「先住民」とはだれか』 世界思想社、2009]
 - ⑪The concept of manhood in post-socialist Siberia: The Sakha father as a wise hunter and a pastoralist. [Sibirica, 8(1), Berghahn Pub, 2009]
 - ⑫「生業文化類型と地域表象―シベリア地域研究における人類学の方法と視座」 [宇山智彦編『講座スラブ・ユーラシア学第二巻 地域認識』 講談社、2008]
 - ⑬Indigenous intellectuals and suppressed Russian Anthropology: Sakha ethnography from the end of nineteenth century to the 1930s [Current Anthropology 47(6), 2006]
 - ⑭「18-19 世紀の北太平洋世界における樺太先住民交易とアイヌ」 [菊池勇夫ほか編『列島史の南と北』 吉川弘文館、2006]
 - ⑮Olenevodcheskie khoziaistova na Severe Yakutii: interpretatsiia kul'turnykh znachenii v kontroli olen'ikh stad. [Sovremennaiia arktika: opit izucheniia i problemy. Yakutsk: IGI, 2005]
 - ⑯An Institutionalized Human-Animal Relationship and the Aftermath: A Reproduction Process of Horse-bands and Husbandry in Northern Yakutia, Siberia [Human Ecology, 30-1, 2002]

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

業績紹介

「シベリア地域研究における新局面の開拓と展開」に対して

紹介者： 小長谷 有紀

(国立民族学博物館 教授)

高倉浩樹氏は、文化人類学の立場にたち、フィールドワークにもとづいて、わが国におけるシベリア地域研究の本格的な確立に寄与するとともに、国際的かつ学際的な共同研究を組織することによって、シベリア地域研究に新しい展開をもたらした。その貢献は、おおむね以下の4つの点にわけることができる。

第一に、フィールドワークにもとづくシベリア地域研究を確立するうえで先導的な役割を果たした。高倉氏は、ソ連崩壊後フィールドワークが可能となったロシア＝シベリアで日本人初の本格的長期の現地調査を、シベリアの先住民エヴェン人のコミュニティで実施した。その成果は、社会主義崩壊直後というタイミングであったことを活かして、綿密な民族誌『社会主義の民族誌—シベリア・トナカイ飼育の風景』にまとめられた。これは、わが国にとどまらず、国際的に先駆的な研究成果であると位置づけられる。高倉氏はその後もひきつづき積極的にシベリア各地におもむき、サハ人やネネツ人社会でのフィールド調査をおこない、数多くの民族誌的研究を蓄積している。とりわけ最近刊の『極北の牧畜民サハ—進化とマイクロ適応をめぐるシベリア民族誌』は、日本でほとんど知られてこなかった東シベリア最大の民族集団について、その民族起源から現代にいたる長期の生業変化を理論的に解説したものである。

第二に、地域間比較を通じた理論的考察をおこない、シベリア地域研究から文化人類学へ理論的な貢献を果たしている。地域間比較のひとつとして、北アジア、中央アジア、東アジアおよび北米北極圏など、文化史的に連関する世界のなかにシベリアを位置づける研究は、現在の政治的環境によって支配された、マイノリティや辺境という固定観念とはまったく異なる地域像をあきらかにした。また、もうひとつの地域間比較として、アフリカなど遠く離れた地域との比較によって、人類文化史という長い時間軸のなかにシベリアの現在を位置づけた。その成果は『シベリアとアフリカの遊牧民—極北と砂漠で家畜とともに暮らす』という読みやすい書籍にまとめられた。高倉氏の関心は、生態学や行政学・法学など多岐にわたっており、その探究心のひろがりや、ゆたかな地域像の構築を可能にしている。

第三に、国際的発信力がきわめて高く、日本人研究者の国際的貢献を体現している。高倉氏は、文化人類学、生態人類学、シベリア地域研究など諸分野における国際的な査読制学術誌に数多くの論文を発表してきた。調査国であるロシアとの共同研究について

は、英語のみならずロシア語でも発表している。そのほか、北極圏研究を推進するフィンランドの研究者とのあいだでの共同研究もおこなわれている。地域研究のもつ国際的貢献の高さという点で、ぜひとも特筆しておきたい。

第四に、シベリア地域研究に関わる学際的な共同研究を組織し、若手の育成やいわゆる文理融合に積極的に取り組んでいる。高倉氏が代表をつとめた国立民族学博物館の共同研究「ポスト社会主義における民族学的知識の位相と効用—制度としての人類学の多元的解明にむけて」（2004～2006年度）は、東欧、ヨーロッパロシア、中央アジア、シベリア等の地域について、人類学、歴史学、考古学、法学など諸分野の若手研究者をあつめたプロジェクトであり、その成果は浩瀚な論集にまとめられた。また、現在進行中の総合地球環境学研究所による「温暖化するシベリアの自然と人：水環境をはじめとする陸域生態系変化への社会の適応」では人文系グループの代表をつとめ、若手人類学者によるシベリア現地調査の機会を積極的に組織化するとともに、文理融合のシベリア地域研究を開拓している。すでに『極寒のシベリアに生きる—トナカイと氷と先住民』も刊行された。それは、人類学のみならず、言語学、生態学、水文学、土木工学など諸分野の専門家によってえがかれた地域誌であり、高倉氏の組織力と発信力の高さを雄弁にものがたっている。

以上のように、高倉氏は、フィールドワークにもとづく綿密な調査、理論的な分析、そして学際的かつ国際的な組織力など、バランスよく研究を推進してきたという実績を有しており、さらに今後の展開が大いに期待される。

2012年度
大同生命地域研究奨励賞

田辺 明生 氏

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授
附属現代インド研究センター長)

略 歴

田辺 明生(たなべ あきお)

1. 現 職 : 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 教授
同研究科附属現代インド研究センター センター長
〔勤務先電話番号 075 (753) 9622〕
 2. 最終学歴 : 東京大学大学院総合文化研究科中退 (1993 年)
 3. 主要職歴 : 1993 年 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手
1998 年 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助教授
2004 年 京都大学人文科学研究所助教授 (2008 年より准教授)
2009 年 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授
2010 年 同研究科附属現代インド研究センター長
現在に至る
 4. 主な著書・論文 :
 - ①『カーストと平等性—インド社会の歴史人類学』〔東京大学出版会, 2010 年〕
 - ②『歴史のなかの熱帯生存圏—温帯パラダイムを超えて』(共編著)〔杉原薫・脇村孝平・藤田幸一・田辺明生編, 京都大学学術出版会, 2012〕
 - ③『南アジア社会を学ぶ人のために』(共編著)〔田中雅一・田辺明生編, 世界思想社, 2010 年〕
 - ④『地球圏・生命圏・人間圏——持続的生存基盤とは何か』(共編著)〔杉原薫・川井秀一・河野泰之・田辺明生編, 京都大学学術出版会, 2010 年〕
 - ⑤ The State in India: Past and Present [co-edited with Masaaki Kimura, New Delhi: Oxford University Press, 2006]
 - ⑥ Dislocating Nation-States: Globalization in Asia and Africa [co-edited with P.N. Abinales and N. Ishikawa, Kyoto and Melbourne: Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2005]
 - ⑦ Gender and Modernity: Perspectives from Asia and the Pacific [co-edited with Y. Hayami and Y. Tokita-Tanabe, Kyoto and Melbourne: Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2003]
 - ⑧「現代インド地域研究—私たちは何をめざすか」〔『現代インド研究』第 1 号, 2011 年〕
 - ⑨“Toward Vernacular Democracy: Moral Society and Post-Postcolonial Transformation in Rural Orissa, India.” [American Ethnologist 34 (3), 2007]
 - ⑩“Recast(e)ing Identity: Transformation of Inter-Caste Relationships in Post-Colonial Rural Orissa.” [Modern Asian Studies 40(3), 2006]
 - ⑪“The System of Entitlements in Eighteenth-Century Khurda, Orissa: Reconsideration of 'Caste' and 'Community' in Late Pre-Colonial India” [South Asia 28(3), 2005]
- 以上のほか、現在に至るまで論文著書多数
5. 備 考 : 2006 年 学術博士 (論文博士 東京大学)

業績紹介

「インド社会の歴史人類学的研究」に対して

紹介者： 池端 雪浦

(東京外国語大学名誉教授)

田辺明生氏の主要な研究領域は、インド社会の歴史人類学である。氏は、「院生として現地調査に向かうころから、フィールドワーカーにしか書けないような歴史を、そして歴史の深みに分け入ったものにしか書けないような民族誌を、いつか書いてみたいと思っていた」と語っている。その志を実現するためのフィールドワークの地、それは東インドのオリッサ地方であった。氏は、この地方に焦点を当て、植民地化される以前の18世紀から、植民地期を経て現在に至るまでの社会の構造とその変化を、歴史史料の解読・分析とフィールドワークを接合した研究として、あるいは社会変化をめぐる理論研究として展開してきた。その研究成果は、主な著書・論文に見るとおり単著、共編著、論文、研究ノート等、まことに多数に上る。

一昨年、それらの研究を集大成する浩瀚なモノグラフ『カーストと平等性—インド社会の歴史人類学』（東京大学出版会 576頁）が公刊された。田辺氏が切り拓いてきた「インド社会の歴史人類学的研究」とその画期的貢献は、本書に集約されていると言っ

てよいだろう。

本書は、過去300年にわたるインドの地域社会の歴史の変容と現代的動態を、通算6年余にわたるフィールドワークと田辺氏自身が在地社会で発掘・入手した新史料の解読・解析とによって描き出した力作である。貝葉文書、地方文書、土地台帳、政府資料そしてオーラルヒストリーに基づく分析を、民族誌的調査の成果と接合することによって、オリッサ州クルダー地方の農村社会における日常世界の変容を精緻に描き出すとともに、その変容をリージョナルあるいはグローバルなポリティカル・エコノミーの流れと照らし合わせることによって、地域社会の動きを国家や市場の歴史的動態との相互作用の中でとらえているところに、本書の優れた特長がある。

本書の主要なねらいは、当該地域社会において1990年代半ばから顕著となった低カーストの政治参加という民主化に伴う社会変容を、長期の歴史のなかのカースト間関係の変化のなかで理解することにある。田辺氏は、現在のインド地域社会の民主化は、外から導入された新たな理念や制度の働きによるばかりでなく、地域の当事者たちが歴史的に蓄積された社会関係や文化的価値を行為主体的に再解釈・再構築することによ

て可能になったものであることを、豊富なデータと緻密な論理展開によって説得的に示している。

とくに、これまでインド社会論において政治的権力構造やカースト・ヒエラルヒーへの過剰な注視によって見失われてきた、インド社会の深層を貫く「存在の平等」という価値を掘り起こし、1990年代半ば以降の民衆主導の民主化——田辺氏が言うところの「ヴァナキュラー・デモクラシー」——の契機がこの価値に裏打ちされたものであると論じたことは注目される。こうした議論は、過去と現在を通覧する田辺氏の鋭い洞察によって初めて可能になったものである。

本書は、歴史学と人類学をデータの的にも理論的にも真の意味で接合したたぐいまれな歴史人類学のモノグラフである。歴史と現在そしてマイクロとマクロを自在に往復しながら論じる、その独自で秀逸な視角と方法は、人類学、歴史学および地域研究の新たな展開を示す画期的なものである。さらに本書は実証性において優れているだけでなく、カーストと王権と宗教に関する論争はもとより、現代インドの政治経済・社会状況をめぐる議論、さらには社会理論や政治哲学までを見据えた、広くかつ深い理論的射程を備えている。それは、インターディシプリナリーということとどまらない、真に総合的な人間理解への著者の志を表すものであり、人類学、歴史学、政治学、哲学などの多岐にわたる分野に波紋をもたらしている。

田辺氏はこれまで、国際的にもスケールの大きな研究活動を展開してきた。主な著書・論文に見るように、研究成果の多くを英文で出版し、また多くの国際学会で積極的に報告して、高い評価を得ている。

国内でも、2007年度から開始された京都大学のグローバル COE「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」において、イニシアティブ4「地域の知的潜在力研究」のリーダーを3年間担ったほか、2010年4月から本格始動した、人間文化研究機構の「現代インド地域研究」推進事業では、京都大学を中心拠点到、東京大学、広島大学、国立民族学博物館、東京外国語大学、龍谷大学の全6拠点を束ねる総括責任者を務めている。

こうした田辺氏の学術活動を高く評価し、さらにまた現代インド地域研究の新たな展開を期待して、地域研究奨励賞の受賞にふさわしいと考える次第です。

2012年度
大同生命地域研究特別賞

森本 喜久男 氏
(IKTT [クメール伝統織物研究所] 代表)

略 歴

森本 喜久男(もりもと きくお)

1. 現 職 : IKTT (Institute for Khmer Traditional Textiles)
クメール伝統織物研究所 代表
〔勤務先電話番号 +855 - (0)12 - 924617〕
2. 最終学歴 : レイデザイン研究所テキスタイルデザイン科卒業 (1974 年)
3. 主要職歴 : 1975 年 手描き友禅工房 森本染芸 主宰
1983 年 難民キャンプのボランティアとしてタイへ
1984 年 NGO「手織物をとおしてタイ農村の人びととつながる500人の会」設立
1988 年 バンコクで草木染シルクの店「バイマイ」始める
1992 年 キング・モンクット工科大学テキスタイルデザイン科講師
1995 年 カンボジアユネスコのコンサルタントとして「カンボジアにおける絹織物の製造と市場の現況」調査を実施
1996 年 カンボジア首相府認可のNPOとしてIKTT設立
現在に至る
4. 主な著書・論文 :
 - ①『森の知恵 The Wisdom from the forest』〔IKTT, 2011 ※クメール語版〕
 - ②「豊かな自然と歴史がカンボジアの染め織りを支えてきた」〔『をちこち』30号, 2009〕
 - ③『カンボジア絹緋の世界—アンコールの森によみがえる村』〔NHK出版, 2008〕
 - ④『Bayon Moon - Reviving Cambodia's Textile Traditions』〔IKTT, 2008 ※英語版〕
 - ⑤「次代につなぐ、営みとしての染めと織り—伝統の知恵を育む森の再生」〔『季刊 民族学』112号, 2005〕
 - ⑥『メコンにまかせ—東北タイ・カンボジアの村から』〔第一書林, 1998〕以上のほか、現在に至るまで染織関係のシンポジウムでの講演等多数
5. 備 考 : 2010 年 社会貢献者表彰 (公益財団法人社会貢献支援財団)
2004 年 第11回ロレックス賞受賞 (ロレックス)

業績紹介

「カンボジアにおける伝統に根ざした生活文化と自然再生への実践的な貢献」に対して

紹介者： あきみち 秋道 ともや 智彌

(総合地球環境学研究所名誉教授)

森本喜久男氏は1948年生まれで、現在、IKTT（クメール伝統織物研究所）の代表を務めておられる。森本氏は1995年以来、東南アジアのカンボジア国においてクメール民族が継承してきた伝統的な絹織物の復興と活性化に関して多大な地域貢献を果たしてこられた。20年に及ぶ戦乱で荒廃し、失われつつあった織物産業を中核とする伝統文化の再興について尽力され、その活動は地域の文化を蘇生するだけでなく、伝統的な織物について国民的な関心を醸成する機会を育んだ。こうしたことを通じて、日本とカンボジア国との国際理解と友好についても重要な懸け橋としての役割を果たしてこられた。カンボジア現地の活動に加えて、森本氏の精力的な活動は日本や世界各地での講演会、セミナー、著作物として公開・公表されている。以上の功労は、森本氏の「カンボジアにおける伝統に根ざした生活文化と自然の再生への実践的な貢献」として大同生命地域研究特別賞に十分に値すると判断する次第である。

森本氏のカンボジアにおける活動は1995年のカンボジア・ユネスコのコンサルタントとして着手され、氏は「カンボジアにおける絹織物の製造と市場の現況」調査を担当した。そのさい、カンボジア国内各地での聞き取り調査から絹織物産業の危機的状況に接した。この状況を踏まえ、森本氏は翌1996年に、カンボジアの伝統的絹織物である「クメール織」の復興と活性化を推進するためIKTT（クメール伝統織物研究所）を設立した。その後、2000年にはアンコール遺跡群のあるシェムリアップにおいて、カンボジア伝統織物の工房を開設した。この工房で制作されるクメール織は、現在のカンボジアで作られる最高レベルの伝統的な作品としての評価を受けるにいたっている。

高い評価を受けたクメール織の復活と再生のみが森本氏の果たした役割ではない。織物産業に現場で従事するのはほかならぬ女性である。戦乱によって夫や息子、あるいは父を失い、生きる糧も収入も断たれ、将来への活路をみいだせない多くの女性が身を寄せる場はほとんどなかった。森本氏はこうした身寄りのない女性たちがじつはクメール織りのすぐれた技術をもつ人びとであることを見抜き、自らの工房での仕事へといざなった。

クメール織の技術に長けた年長者から若手への技術の継承が工房での大きな課題であった。森本氏による、年齢層を超えた女性技術者の育成を通じて、織物制作に従事する女性たちの自立心が芽生え、経済的にも貧困から自立に向けての希望が芽生えた。

技術面でみると、工房で制作されるクメール織はクメール文化の伝統に徹したものである。じっさい、絹織物の原料となるのは在来種の蚕と天然染料である。工房では養蚕のための桑栽培がおこなわれた。天然染料の原料となる草木類はすでに戦禍によって荒廃した森林環境にはほとんどなかったもので、森本氏は率先してシェムリアップ郊外に約 23ha の土地を確保し、森の再生に取り組むこととした。この土地に、シェムリアップ市内にあった工房の多くの機能とそこで働く女性たちとともにこの土地に移転させ、新しい村を作った。したがって、この段階で森本氏によるプロジェクトは、クメール織の活性にとどまらず、織物産業の復興と自然環境の再生、ならびにそれらを活かす「暮らしの知恵」の再生へと拡大した。森本氏はこの新しい村と、森林再生ならびに伝統織物の制作を含む一連のプロジェクトを「伝統の森」再生計画と名づけている。

以上のように、伝統的な織物技術を再生し、合わせて地域住民の生活向上と自然環境の再生を統合的に進めてきた努力と着想は、途上国の経済発展と環境保全を合わせて進めることが世界でも主流となっている現在、きわめて意義ある活動といえるだろう。森本氏は単なる NGO 活動家ではなく、自ら京友禅の染め職人としての技術的な背景と絹織物にたいする美への執着を備えている。世界では伝統的な織物への評価がなされるなか、自らの生活を投げうって推進してきた活動にたいして、2004 年には日本人として第 11 回「ロレックス賞」を初受賞した。

「伝統の森」計画は織物制作に従事する社会的弱者である女性関係者だけでなく、周囲を確実に巻き込んでいる。国内外の訪問者に加えて、カンボジア国王などをはじめ政府関係者などにも注目されている。「伝統の森」の中にあつた子どもたちの私塾も正式の学校として認可され、地域の若い芽は着実に育っている。森本氏の活動は、従来の国際援助の常套手段であつた機械や資材の売り込み、箱もの・道路などの建設しかなしえなかつた日本の国際援助とは質の異なる、地域に根差した国際協力の典型例であるといえるだろう。